



Title	[26]燃料窃盗
Author(s)	松山, 文生
Citation	満州ハイラル戦記, pp.221-231; 1994
Issue Date	1994-08-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/29544
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-25T16:17:36Z

燃料窃盗

ある日の夕方であった。私は人參畠で皆と一緒に人參をひっこ抜いていた。少し薄暗くなつて収容所との間のジャガ芋運搬に日に二、三回往復している最後のトラックが出発するという頃、獣医務伍長がジャガ芋畠の中隊本部の方から馬に乗って走ってきた。私に「この最終便のトラックに乗って収容所本部に帰るようにとの命令です」と言った。何か分からないが、命令なら帰らなければならぬだろうと思ひ、獣医務伍長の乗ってきた馬に飛び乗りジャガ芋中隊の私の天幕に行き、私物を集めて出発するばかりになつていたトラックの荷台に乗り込んだ。

私が乗るとトラックは直ぐ出発した。蜂蜜小屋の前で未だ作業中の兵隊と顔を合わせた。トラックは走る。兵隊達が追っかけて来て、人參を何束かトラックの荷台に投げ込んでくれた。

私は有り難うと言った。道々私達の唄のジャガ芋を拾い麻袋に詰め込んだ女が「乗せてくれ」と日本の兵隊の運転手に話し、乗り込んできた。私はゴロゴロと転がるジャガ芋の積んである荷台に横になり、マホルカを吸った。段々薄暗くなる風景と夕焼け空を眺めながらも永久に見ることもない、ジャガ芋中隊の方を見やりながら、「ドスベダーニヤ、ドスベダーニヤ(さようなら、さようなら)」と小声で口走っていた。ジャガ芋を拾った女は途中で降りた。降りる時に、日本兵の運転手に乗った距離に見合うルーブル紙幣を渡していた。ヒッチハイクをしないのには、感心した。日本のトラックの運転手の手に入るチップも相当な物になるだろうと邪推した。こういうのを下司のかんぐりというのもかも知れない。トラックに乗って走りながら横を見てみると、ソ連の将校が妻や子供と共に自分に当てがわれた唄に歎をいれている長閑な風景などが見られた。

C 収容所に着いたのは大分暗くなってからであった。収容所の門を入ると直ぐ、日本軍の副官のK中尉に会った。「松山中尉か、ご苦労さん、そのまま経理室に行ってくれないか」と彼は言う。将校宿舎に行くのではなかったのかと私は思ったが言われる通り、経理室に行ったら、「今着用している衣服を脱いで、ここにある衣服と着替えてください」とそこにいた兵隊が言っ

た。おかしいなあと考えながら服を着替えた。起居するのは将校宿舎ではなくて、その西に隣接しているアクティブ（共産党グループ）の使っている大きな部屋で、私の収容所から私も入れて八人、他の収容所から四人計十二人の将校が寝とまり出来るように準備されていた。

そこに落ち着いて、収容所本部の職員の兵隊がいる兵舎に行つたみた。皆、久しぶりの再会を喜んでくれた。いろんな話をしている内に、「松山中尉殿は、炭坑に行くのではないですか」と言いだす兵隊もいて、私も何が何だか分からなくなつた。ただ、二、三日仕事をせずつ済むのは有り難いと私は思った。翌日、私は洗濯場に遊びに行き、私は農場の藁布団の枕の下にソ連紙幣を六十五ルーブルを忘れてきたことを話した。洗濯場の伍長が「あとから、取りに行かせますから、私が六十五ルーブルここで中尉殿にお渡ししましょうか」と言ってくれた。私は今後、金は必要ないと信じていたので、丁重に礼を言つて断つた。然し、今でも彼の申し出を心から感謝している。あの頃はまだ日本人の気風の中に、お互いに信頼する気持ちが残つていたことが嬉しいのである。

次の日、収容所の広場で会つた兵隊は「軍医殿、軍医殿は日本にお帰りになられるのですよ。今日、私は帰還列車の炊事車を作ってきました。間違いありません」と言ってくれた。私の余り知らない兵隊であつたが、親切さが身に沁みた。ソ連での生活が殺伐としているために、僅かの情けで胸が熱くなるのである。次の日、スターリンへの感謝状に、部屋にいる将校十二名

が署名した。日本に帰れそうな気がしてきた。

その翌日、收容所付きのソ連の少佐が私達のところに午前十時頃やって来て、私達をC市の駅まで連れていった。駅の横から構内にはいり、ちょうど私達の目の前でゆっくり動き始めた機関車を「これだ。これだ」と言つて、運転手に呼びかけて止め、私達に機関車の引つ張っている貨車にのるように言つた。貨車には太い針金を蚊取り線香みたいにグルグル巻にした錠前がかかっていた。錠前をはずして私達が中にはいろいろとすると、機関車の運転手が将校一人当たり十五ルーブル出せと言う。私はルーブルも持っていない。どうなるかと思つていたら、誰かが私の分も出してくれた。捕虜を運ぶのに金を取るとはソ連もケチな教育をしているものである。機関車は私達の貨車を二時間くらい引つ張り、引き込み線に入れ、どこかに行つてしまった。私達の貨車はポツンと残された。どうなるのかと不安にかられたままじつと貨車に乗っていたら、夕方頃、見習士官がどこからか十二名分の夕食を持ってやつて来た。

聞けば、この先、二キロメートルくらいの所に将校ばかり約五〇名乗せた貨車があり、そこから来たのであつた。私達はどこに行くのかと聞いても、何も知らないとの返事で心細いことおびたらしい。私達はとにかく、西に行けば、炭坑、東にいけば帰国の可能性がなきにしもあらずと言うことで意見が一致した。夜中頃、私達の貨車は機関車に引つ張られて見習士官達の乗っている貨車群と接続された。この列車には兵隊の乗っている貨車もあり、全部で一〇〇〇

人くらい乗っていたのではないかと思う。

列車は東に向かつて走っていく。私達は愉快であった。日本に帰れるかも知れないという儂ない希望が少し持てたことと、列車に何日乗るか分からないが、その間は働かなくても、三度の食事にありつけるといふ安堵感がそんな気分させたのであろう。

私は将校が二四人くらい乗っている貨車に乗りこまされた。私は元氣があると見られたのか、炊事車勤務を少尉候補出身と思われる兵科の大尉に命じられた。炊事長はハイラルで一緒であったS主計中尉であったので安心した。六名の将校が炊事勤務となり、半数が二四時間勤務の二四時間休養であった。それ故、三名が毎日炊事車にいて、三名が将校貨車で休んでいた。

私が将校貨車で休養をとっていた時、全然知らないZという中尉が「君は何収容所から来ましたか」と聞く。私がC収容所から来ましたと答えると、「君の収容所のI軍医少尉は昭和の天一坊ですよ」とZは言う。詳しい話をしてくれたが、それを聞いた私は驚いてしまった。彼の言ったことを要約すると、次のようである。

ソ連への入国時、I軍医少尉は衛生兵長だったそうだ。それが列車の中で「内科診療の実際」を読み、ソ連の奥地の収容所に入れられた時、その医務室に出はいりしているソ連の看護婦にS医専出身の医者だと言ひ、医務室に軍医がないのを幸いに（衛生准尉しかそこにはいなかったそうだ）そのソ連の看護婦から日本軍の大隊長に話して貰ひ、見習士官になり、軍医の

仕事をするようになった。ところが薬の量を間違えて、兵隊を死なせかけた。自分も試しに同じ薬の同じ量を服み、重傷になったと言うから傑作である。

私がI少尉から聞いた、ハルピンからペーアンまで、片手にピストルを持って線路伝いに満人を警戒しながら歩いていった話は実は某軍曹のしたことであり、兵隊が脚絆が無くて寒そうであったので、外套の裾を切つてわたしたことは実は某准尉のしたこと、I少尉がしたというのは真つ赤な嘘だと言っていた。ただI少尉は記憶力が抜群に良いので、A兵隊に対してはどこまで嘘をついたか、B兵隊に対してはどこまで嘘をついたかちゃんと覚えていて、A兵隊にはその前の話の続きを、B兵隊に対しては、前に話した続きをするのでA兵隊もB兵隊もI少尉の話信ずるのだと言っていた。

どうして偽軍医ということがわかつたかと言うと、I少尉が病気の時、近くの収容所の日本軍の軍医が代わりに診察に行き、とんでもない病名がつけられているのを見て、I少尉に「貴官は本当の軍医か」と尋ね、I少尉が偽軍医であることを認めたので本当のことが判明したらしい。I少尉は彼の前歴を知っている者は、その収容所から全員他の収容所に移動させたということであつた。私はI少尉のお蔭で員数外となり、列車に乗っていられるので、偽軍医の出現を喜ぶべきか、悲しむべきか複雑な心境であつた。

炊事車に積んである白樺の薪は、食事を二、三日作るとなくなりかけた。ソ連の輸送指揮官

に連絡しても、適当にしろというだけでちががかない。燃料は盗むしかないと結論に達し、燃料窃盗専門の将校を選んでよろしくやって貰うようにし、その代わりその将校の人々には食事を少し余計にだすようにした。

先ずソ連のチャサボーイ（警戒兵）に頼んで、ある駅に着いた時、鋸と斧を持ってきて貰った。次の駅に着いたら、直ぐ鉄道線路の枕木を盗んで、十二、十三人の将校で囲んで駅員に見られないようにして、手早く切つて枕木の形をなくしてしまつた。形がなくなつたものは枕木でないから見つかつても材木を拾つたと言えば通用するのである。

石炭は駅が近づき、列車が徐行し始めると、盗み係りの将校の偵察員が扉を少し開けて、どこかに石炭がどの位あるかを見て、盗む方法を考える。そして、うまく盗んできて炊事車に持ってきてくれた。

ある駅では、私達の列車の右側に石炭が高さ八〇センチメートル、列車と平行に長さ二〇メートル、幅一〇メートルくらいの広さで積んであつた。ソ連の男の老人の番人が八〇センチメートルくらいの棒を持って一人いた。石炭を取ろうとすると、おこつて棒を持って走つてくる。盗みを請け負っている将校達は時間差攻撃を掛けた。西から取ろうとすると、番人は西の方に走つてくる。その隙に東の方の盗み専門の将校が石炭を取る。番人はそれこそ右往左往で挙げ句の果て、石炭は見事に盗まれ、私達の炊事車に届けられた。この将校団は北支で戦争をして

いるので、そういう駆け引きは実に上手であつた。

番人は走り回り、盗みを防ぐ努力をしていることでノルマを果たしているので、石炭山の横をソ連軍の少佐が奥さんと一緒に笑いながら歩いてはいたが、日本の将校群を叱りもしなかつた。日本ならそうはさせないであろう。

私達は薪や石炭だけでなく水の心配をしなければならなかつた。列車は四時間くらい無停車で走り続けることもあれば、半日くらい同じ駅に止まっていることもあつた。駅に止まつたらすぐ水を汲めるようにしておくのも炊事係りの大切な仕事であつた。一度かなり大きな駅に止まり、私はバケツを持って水を汲みに行つた。水道栓から汲むのではなく、その時は汽車に水を供給する給水塔から水を汲まなければならなかつた。迷彩服を着た見習士官がハンドルを回したらドドドツと水が出始めた。私は急いで天幕のような硬い布を筒にして作つてある給水口の下にバケツを置いた。水は余りにも落下速度が強いためバケツから飛び出して、全く溜まらない。「力強ければ、良し」ではない。水勢が弱つた頃を見計らつてやつとバケツに水を入れ炊事車に持つて行き、一安心したことがある。

水に関しては、もう一つ想い出がある。ある駅に夜、列車が止まつた時、私はバケツを二個持つて水汲みにでかけた。列車の後ろから三両目に炊事車があり、水道栓は列車の後ろ二〇メートルくらいのところにあつた。私は水道栓のところに行き、バケツに水を入れてみると、列車

が静かに動き始めた。驚いた私はバケツの水を捨てて、列車を追っかけ、最後尾の車両にやつと間に合いほつとした。あの時、汽車に遅れていたら私の運命はどうなっていたか時々考え、今でもバケツを投げ込み、慌てて列車にすがりついた私の慌てようをつい先刻のこのように思い出す。

炊事勤務の時は、一緒になった将校と馬鹿話をしながらのんびり仕事をした。他人の妻と情が通じていたというOという主計少尉がいたが、彼の話は殊に面白かった。その女と夫がよそに赴任する時、Oが見送る人々の一番後ろにいて、その女が彼に気づき顔を真っ赤にしたという話などは、実際にあったことでないと味わえない雰囲気を醸し出していた。O少尉は「軍医殿、私は日本に帰ったら必ず金を貯めて大金持ちになります」と言った。ソ連の捕虜生活がO少尉にそういう決意をさせたのであろう。私は「そうですか。うーん」と言つて聞くしかなかつた。それが私に出来る精一杯の返事であつた。昭和五十六年頃、やっとO少尉の居所が分かつて私は電話を試してみた。私のことを覚えていてくれた。「今の奥さんは、あの時の彼女ですか」と聞いたら、「そうです」という返事で、意中の人と結婚出来てO少尉は幸福な人生を送っているなあと感じた。

牛の骨つき肉を料理するため、肉を骨からはずさねばならない仕事があつた。某高商を出た少尉と一緒に肉を骨から外す作業をした。私の方が解剖学を勉強しているため、手際よくさば

けた。私は時々肉の小さな塊を口の中に抛うり込みながら彼が歌う少し調子外れの「巴里の屋根の下」という歌を聞いた。哀調を帯びた調べで、どこかに行くあて度もなくさ迷っている私達の身の上を表しているようで、この列車の旅にふさわしかった。私はこの歌を先頃、テレビの「巴里の屋根の下」を観ている時に聴いて、帰還列車の中のことをあれこれ思い出した。

途中の駅で貨車の編成替えがあった。鋼鉄製の貨車と木製の貨車を連結する時の規則があるらしいのだが、それを私達の輸送列車は守っていないのだから。お陰で直ぐ隣にあった将校貨車は遙か前方の機関車の近くに行き、飯上げに来る将校の歩く距離が長くなり、大変な模様であった。

ハバロフスクで入浴させるという噂があったが、何事もなく通過した。イマンの駅を通り過ぎる時、誰かが感慨深気に「ここはイマンか」と呟いた。イマンは虎頭の正面に当たり、日本軍の攻撃目標地点の一つであったから、終始、耳にしていた印象に残る場所であったのである。私が興味を唆られたのは鉄道の沿線に人の行き来が割と多くなり、山や畠に縁が少しずつ濃くなり始めたことであった。

ウォロシロフという駅で暫く停車した。イマンを出発した後、南東に向かって進んでいた列車はウォロシロフを出てからは、東に向かった。どのくらい列車が走ってからだだったろうか、私には海の匂い、潮の香りがしてきた。昭和十九年十二月に、私が陸軍軍医中尉に任官し、

関東軍に赴任するため博多から玄界灘を関釜連絡船の昌慶丸で釜山に渡って以来、海を見てい
なかつたので、潮の匂が鼻についたのであろう。暫く経つと、遠くであるが、海が見えた。やつ
とここまでこられたのかという思いがした。間もなく、ソ連の輸送指揮官の大尉から「列車は
ナホトカに行く。明朝の午前二時頃着く予定である。到着したら貨車を元のように清掃してソ
連に引き渡すようにしろ」と言う命令が来た。

私達炊事係りはおお急ぎで夕食を作り。将校車に配った。炊事車に搔つ払って積みこんであ
る石炭や薪を走る列車から捨てた。ソ連のチャサボーイが偶々炊事車に一人乗っていたが、止
めようともしない。日本が戦勝国であり、捕虜が私達がしたようにすれば、十人が十人、到着
駅に着いてから石炭は石炭、薪は薪とキチンと分けて降ろすように誰でも捕虜に指示するか、
命令するであろう。ソ連人と日本人との違いはこういう点にもあったのである。チャサボー
イの任務は私達が逃げないように警戒することであつて、石炭や薪の投棄に文句を言うことは、
彼らの任務外のことなのでしらん顔をしているのである。要するに任務外の件に関しては何ん
なことが起きようと、知ってはいないのである。私達は快適に仕事を進め、ナホトカに定時に
着いた時には炊事車は完璧に元の貨車になっていた。